

第374空輸航空団と同盟国 70周年のクリスマスドロップ作戦に参加 374th Airlift Wing and allies support the 70th Anniversary of Operation Christmas Drop

December 17, 2021

By Tech. Sgt. Joshua Edwards
374th Airlift Wing Public Affairs

横田基地第374空輸航空団は、同盟国およびパートナー部隊とともに、今回で70周年を迎えるクリスマスドロップ作戦に12月5日から参加した。

1952年から行われているクリスマスドロップ作戦は、国防総省で最も長く行われている人道支援・災害救援訓練である。

第36空輸中隊ロードマスターのヴィンセンゾ・ガレゴス技能軍曹は、「チャンスは一度きりなので、最高かつ完璧なレベルで実践できる訓練をする必要がある。どこかに赴いた地で、津波や地震、台風などの災害が発生した際に、人々に必要な物資を提供できるよう、きちんと任務を遂行できなければならない」と話す。

今年は、民間のドナー、慈善団体、グアム大学が、ミクロネシア連邦やパラオ共和国を含む南東太平洋の55以上の離島で暮らす22,000人以上の島民に援助を提供できる量の食糧や物資を集めた。

第36空輸中隊のパイロットで同作戦の指揮官アレックス・ランダル大尉は、「米国には太平洋地域で援助を行ってきた長い歴史がある。こうしたクリスマスドロップ作戦は、実際に島民たちを助けながら、人道支援や災害救助を実践する特殊な機会を与えてくれる」と述べた。

第374空輸航空団は今回の作戦において、グアム・アンダーセン空軍基地の空兵のほか、韓国空軍、日本の航空自衛隊などの国際的なパートナー部隊と協力した。

航空自衛隊第401飛行隊パイロットのヤマシロ・ショウリ1尉は、「パートナー間の協力はとても重要だ。この機会には人道支援の能力を向上させ、自由で開かれたインド太平洋を育む我々の取り組みを示すものだ」と語った。

第374空輸航空団とパートナー部隊は、コストを最小限に抑え、安全性を最大限に高めるため、C-130JやC-130Hスーパーハーキュリーズを利用して、低コスト低高度の物資降下を行った。

「我々のC-130は、このミッションを遂行するために独特な（飛行）態勢を取る。クリスマス・ドロップ作戦で最も充実感を味わえるのは、梱包箱を押し出し、パラシュートが開いた瞬間の子供たちの顔を見ることだ。自分たちが彼らの人生に与えているインパクトを目の当たりにすることほど、素晴らしいことはない」とランダル大尉は語った。

